

卓 話

平成 28 年 7 月 16 日

『 ガバナー公式訪問 』

2016-17年度国際ロータリー第2630地区
ガバナー 劔田廣喜 様

本日の公式訪問合同例会にあたりましては、当グループ田邊ガバナー補佐には何回となく年度開始前、開始後と各クラブ訪問、更に加えて会長・幹事さんとの懇談会を通じまして、クラブの現況把握をしていただくとともに、RI 会長のテーマ、並びに地区目標、地区の基本方針について説明ねがい、コミュニケーションを取っていただき、今日を迎えました。設営された担当のクラブとロータリアンの方々に厚くお礼申し上げます。今日はスピーチの機会を与您えいただき誠にありがとうございます。ただ、これからお話しさせていただくことは、ロータリーの先輩、先人が言われたことであり、私も同感と思ひ、皆さんにお伝えするという事ですので、ご了承いただきたいと思ひます。



＜ロータリーの心＞ 私たちはこれまで“ロータリー”をあまりにも難しく考え、語ってきたのではないかと思ひます。ロータリーという組織は決して複雑で難解なものであつてはならないし、そうなるものでもありません。なぜならばロータリーの理念は古くから人間が大切にしてきた道徳、つまり中国で古くから使われる仏教用語の寛恕（かんじよ 広い心で許す）（わたしは、思いやりの心、助け合いの心と言つております）。ですから、ロータリーが訴えかけている奉仕の理念は時代を超えて変えてはならないロータリーの心と呼びなおしてもいいと思ひます。ここで、ロータリーの心とは何かを解りやすく話させていただきます。

「昔、インドに相思相愛の王様夫婦がおりました。ある日、王様が最愛の奥様に、「よく考えてみると、私は、最愛のお前より、私自身が一番愛しいように思ふ。」といわれました。それに対して奥様も、「実は、私も、貴方より私自身の方が一番愛しいと思ひます。」と答えられました。王様は「皆が皆、自分自身が一番可愛いと思つたら、この世の中は成り立たないから、お釈迦様に聞いてみよう。」と云つて二人でお釈迦様を尋ねたそうです。お釈迦様は、二人の話をして「人間は誰でも皆、自分自身が一番可愛いのです。それでいいのです。ただ、相手も、自分自身が一番可愛いと思つていることを忘れないように。」とお諭しにられました。ここから、相手に対する思いやりの心が芽生え、自分以外の人に対する愛が始まるのです。これがロータリーの心であります。ここで職業奉仕の説明をします。

職業奉仕は儲けたいという内向きのエネルギーとお客に役立ちたいという外向きのエネルギーの調和です。これは寛容なくしては果たせません。この相反するエネルギー中心に、ロータリーの心（相手に対する思いやりの心）を置くことが職業奉仕であります。またこれが巡り巡つて自らの利益へ帰つてくるという因縁果律（世の中の成り立ちは、善悪で構成されているのではなく、あくまで前世因縁 なのである）です。地球上でボールを投げあげたら、やがて地上に落ちてくることに似て、覆すことのできない自然の法則なのです。だからこそ永続しているのです。

＜ロータリーの変貌＞ 奉仕の第1世紀を終え、国際ロータリーはロータリアンに「ロータリーの心」を浸透させ、ひいては世間の人に高潔性をもつてなるロータリーとして認知してもらふという初期の目的を達成することに失敗しました。「ロータリーの心」は世間で認知されないばかりか、ロータリアン自身の職業上の不正も相次いでいます。ロータリーの存在すら世間で認知されていないありさまです。アインシュタインは語りました。「同じことを繰り返しながら、違ふ結果を期待することは、狂気である」と。かくしてRI は従来の手法を変えて出してきたのが、「戦略計画」、財団の「夢計画」に他ならないのです。「戦略計画」それを支える「夢計画」で訴えていることは、「人道的奉仕活動の重点化と増加」であります。そのための財政的支援、それを可能にする会員増強、それを促進する公共イメージ、認知度の向上を目指したのです。ところが「人道的奉仕」が「職業奉仕」を凌駕してしまつたのです。この変貌が行く末を不安にしてしまつている現在です。

<例会出席の重要性> 2016年の規定審議会の改正で例会や出席、さらに会員の種類までクラブ独自で決めることができます。例会の頻度を最低月2回にすることが可能になりましたし、出席や会員の種類につきましても独自の規定を定めることも可能になりました。

私の地区方針（ガバナー信条）は、最も出席する者 最も報いられる。この方針は完全に RI の方針と逆行しております。ジョン F ジャーム RI 会長は例会を何回開いたかよりも地域社会にいかに変化をもたらしたかが重要と言われ、ジョン・ヒューコ事務総長は戦略的な焦点の一つとして、出席要件よりも参加を重視すると決めたら、ロータリーはどんな組織になるでしょうか。神聖化された伝統の一部を真剣に見つめ直し、クラブが一番よいと思うやり方で運営するための柔軟性をもたせる時期が来ているかもしれません。参加しやすいクラブをつくれば、より多くの人にとってもっと魅力的な組織になるのではないかと考えます。繰り返しますが、重要なのは出席ではなく参加です。と言われております。このような考え方が RI、ロータリー財団の根底にあります。しかし、私は例会の目的は癒しの場、憩いの場であると同時に、異業種の仲間たちとの親睦や職業上の発想の交換を通じて、相互に分かち合いの精神による事業の永続性を学びあい友情を深め合い、反省や志の再確認をし、自己心の改善を図ることであり、その結果として奉仕の心、思いやりの心、助け合いの心が生まれてくるのだと思います。米山梅吉翁が言われた「ロータリーの例会は人生道場」とは、会員同士が切磋琢磨、自己研さんして奉仕の心、職業倫理を高めるということであります。国際ロータリーも日本のロータリーも例会に対する考え方が乖離してきていますが、互いの長所は伸ばし、短所は改善し急激な改善ではなく時間をかけてロータリーの本質とは何かを考えていかなければならないと思います。このように例会の意義を話しておりますが、実際問題として自己改善できたかという点と成果は少しも見えません。そこで、こんなたとえ話があります。

「昔、スイスの片田舎にお婆さんが住んでいました。お婆さんはざるに羊の毛を入れて、小川で洗ってました。そこに神父さんが通りかかり『お婆さんは毎週教会に来て私の説教を聴いているので、さぞ物知りになられたでしょうね』と尋ねました。お婆さんは『聴いてもすぐに忘れてしまうので、何も残っていません。しかし、私はそれで良いと思っています。神父さん、ざるの中を見て下さい。水は入っては流れ、入っては流れていますがざるの中の羊の毛はこんなに綺麗になっていきます。私は神父さんの話を聞いては忘れ、聴いては忘れていますが、私の心は少しは綺麗になっていくと思います』と答えたそうです。」

私は、「ロータリーの親睦」と「例会出席の意義」を噛み締め、この老婆のように、焦らず、楽しいロータリーライフを送ろうと思っています。ロータリーは変わっていかなければならないが、ゆっくりと変わっていくのが良いと思います。

<これからのロータリー> 最後に RI と日本(私)のロータリー考え方には大きな乖離があります。それは、RI は若い人を対象にプロモーション、リクルートしています。しかし、日本のロータリーは世界でも高齢化が顕著なお年寄りのクラブロータリーアンを対象にしております。そして、RI はロータリーとは人道的世界社会奉仕のネットワークという考え、日本のロータリーは職業人、実業人の世界的ネットワークという考え、この乖離に肯定的な折り合いをつける時が来ています。

ロータリーが永続的に発展していくには、若い世代の入会が必要です。これについて、国際協議会で聞いた話です。フレッシュな視点が軍に改革をもたらすきっかけとなった、ある事例です。

新米兵たちの基礎訓練で、教官が大砲の使い方について説明している時のことです。弾をこめた後、8秒数えてから発射するようにと教官は言いました。教官が先に進もうとしたとき、新兵の一人が、軍隊では通常タブーとされている行動に出ました。手を上げて質問したのです。「教官、なぜ8秒待たなければならないのですか？」明らかに面食らった教官は、それに答えずに次の説明を続けました。しかし、その質問が頭から離れず、数日後、8秒ルールについて同僚に効いてみました。軍事マニアだった同僚が調べた結果、8秒ルールの由来が明らかになりました。昔は馬を使って前線に大砲を運んでおり、発射音で馬が怯えないように大砲から遠ざけるのに必要な時間が8秒だったのです。ここ数十年、馬は使っていないのにもかかわらず、ルールだけが残ったというわけです。おかしい話だと思われるかもしれませんが、ロータリーにも同じようなことがあると思います。

ロータリーは職業人、実業人の世界的ネットワークという存在理由を念頭において、これまで大切にしてきた伝統、ルールを見直し、若い人が入りやすいクラブにしていかなければならないと思います。